

# 藤原定家「閑居百首」について

今井明

本稿は、藤原定家の家集『拾遺愚草』正編・上巻に「閑居百首」と命名されて収められている百首歌を一つの作品として考察することを目的とする。就中、その作品に立ち現れる主体の「心」の問題に着目して論を進めることになろう。

本百首の成立は、家集が記す所「文治三年冬與越中侍従詠之」に拠れば、文治三（一一八七）年の冬に「越中侍従」すなわち藤原家隆と二人で詠んだものらしい（『玉吟集』に拠れば同年一月）。定家自身の発案であったかと思われる。時に正五位下侍従の定家は二六歳、従五位上越中守兼侍従の家隆は三〇歳で、ともに卑位卑官を嘆く身であった。ために、定家の歌に不遇者意識に起因すると思われる、物憂く寂しげな作が見えることもまた確かである。

従来の研究は、本作品をそうした定家が現実には担わされていた不遇感へと還元することに読解のポイントを置いてきたように見受けられるが、しかし、本百首の主題がそのような不遇者の訴嘆で統一されているのかと改めて問うてみると、必ずしもそうであるとは言えない問題を含み持っているようである。

本稿では、そうした不遇感のみに収斂しえない歌をもう一度読

み直して見て、そこに提起されている問題は何かを探ってみたいのである。やがて浮び上がってくる問題は、作品に立ち現れる主体の「心」の問題となるはずである。

## 一

青年期の定家の作品に和泉式部や源俊頼の歌から強い影響を受けたものが見受けられることはこれまでにも指摘されているが、この「閑居百首」中にも同様の性格を持つ歌を確認することができ、従来その影響関係が指摘されていない歌二首を左に引いて、具体的に示しておきたいと思う。

375うくつらき人をも身をもよし知らじたゞ時のまのあふことも  
がな

右の歌は本百首「恋十首」の一首である。当該歌の本歌・参考歌としては、和泉式部の

身のうきも人のつらきもしりぬるをこはたがたれをこふるな  
るらん  
(和泉式部集558)

後まではおもひもあへず成りにけりただときのまをなくさめ

しまに  
(和泉式部統集43)

あらざらむこの世のほかの思出に今一度のあふこともがな  
(後拾遺集・恋二763)

の三首を挙げておくべきであろう。当該歌の構想の中心になつて  
いる歌(すなわち本歌)は、最初に掲げた「身のうきも」歌であろ  
う。『詠注藤原定家全歌集』(以下『詠注』と略称する。)が本歌と指  
摘する『拾遺集』恋一・678番の朝忠歌「あふ事のたえてしなくは  
中中に人をも身をも怨みざらまし」は定家歌の第二句の典拠とは  
なっているが、そうした古典的な句表現と連接させつつ、この歌  
は謂わば和泉式部の三首を枠組みとしつつ一首を再構成したもの  
と捉えておく。

次に、俊頼の歌からの撰取と認定すべきものを示す。

308 春雨よこのはみだれしむら時雨それもまぎるゝ方はありけり  
は「春廿首」中の歌である。当該歌は俊頼の「恨躬恥運雑歌百  
首」のうちの一首、

もみぢちるおとは時雨にたぐへどもまぎるかたもなき身な  
りけり  
(散木奇歌集44)

を撰取したものであるが、当該歌の本百首における意義は単に古  
典歌の表現を撰取しているという、その技法上の問題にとどまる  
ものではないであろう。それはこの「閑居百首」という一つの作  
品世界が、和歌の表現史の上でどのような系譜に立つものである  
かを鮮明に提示する意義をも負っていたと思われる。俊頼の百首  
歌「恨躬恥運雑歌百首」は述懐に寄せた作であるが、定家はそう  
した先蹤の作品世界を引用することで、「閑居百首」という作品  
の位置を示そうとしたものと思われる。

しかし、定家が俊頼の「恨躬恥運雑歌百首」を引用しているか  
らといって、定家の本作品もまた述懐に寄せた百首歌なのだ、と  
断定してしまうことには躊躇せざるをえない。そのように単純に  
割り切るのは危険であるように思われる。

この歌にいましばらくこだわれば、当該歌では俊頼歌の「身」  
といった現実的な感触を持ったことばが欠けているため、主体の  
思いが果たしてその現実的・具体的な二次元の問題にあるのか、実  
ははぐらかされていて曖昧になってしまっているように思われる。  
浮び上がるのは春雨に降り込められた無聊をかこつ主体そのもの  
なのであって、その無聊の原因を指示する具体的なもの(俊頼歌  
では「身」であった)は曖昧なまま放り出されているのである。た  
だし、こうした歌はまた確かに、定家が命名した「閑居」なる状  
況設定と対応しているのであって、単位卑官を嘆く定家個人の心  
象風景としての位置を与えてもよいのかも知れず、そのような読  
解を完全に退けることもできないであろう。

しかし繰り返しになるが、この歌は何か無聊に苛まれている主  
体を浮き彫りにしてはいるのであるが、その無聊の原因を単位卑  
官の「身」であるからとは詠んではいけないのである。

とすると、一見述懐的な表現を持ちながらも、この無聊をかこ  
つ主体を抱えていた問題というか、本百首で提示されている主体  
は単位卑官を嘆く不遇者としてのみ登場しているのかを、あらた  
めて読み直してみる必要があるように思われる。それが取りも直  
さず本稿の課題なのである。

ところで、右に見てきたような、和泉式部や俊頼歌の撰取とい  
ったことは、大きく捉えれば青年期の定家の作品の傾向の追認と

してまとめておいて問題はなからう。

ただし、俊頼の「恨躬恥運雜歌百首」の撰取は、本作品「閑居百首」の構想の契機を考える上で、注意しておくべき事柄である。私は、定家の「閑居百首」の詠作動機には、父俊成が二七歳（本百首制作時の定家の年齢とほぼ同じ。また「閑居百首」の部立構成は堀河百首に準ずるものである。）の時に堀河百首題を述懐に寄せて詠んだ「述懐百首」が強く影響しているのではないかと想定しているのであるが、いまは「閑居百首」の百首歌としての位置付けを定家自身が俊頼の「恨躬恥運雜歌百首」を撰取することで鮮明化しようとしている、という点だけを繰り返し述べるにとどめて、以下本作品から考え及んだことを述べたいと思う。

## 二

さて、本百首のうち不遇・沈淪を訴える主題のもとにまとめられているのは、「述懐五首」とある歌群である。ここには、卑位卑官を嘆く主体があらさまに表現されている。

381 むれてゐしおなじ渚の友づるにわが身ひとつのなどおくるらん

382 こす浪ののこりをひろふはまの石の十とてのちも三とせずくしつ

383 おしなべておよばぬ枝の花ならばよそに三笠の山も憂からじ  
384 影きよきくもみの月をながめつゝさても経ぬべき此世ばかりを

385 これも又おもふにたがふ心かなすてずは憂きをなげくべきかは

381 番歌は、仲間から取り残されて一人官位の停滞を悲しむ「身」であると具体的に詠まれており、また382・383 番歌は、「のこりをひろふ」すなわち拾遺（侍従）にあつてすでに一三年経っていること、「三笠の山」すなわち近衛職を望んでもそれが叶わぬつらさを詠んでいる。そうした、具体的な「身」の詠嘆から四首目の384 番歌では、空しく「此世」を送ってしまうのではないかという現世への捨て切れぬ執着が取り出されて来て、最後の385 番歌では、そうした現世への執着を断ち切れない己れの「心」そのものを見据える主体が立ち現れて来るのである。この「述懐五首」の構成は、結局「心」の問題へと流れ来たって一応の帰結をみるのであるが、極めて具体的な慨歎の歌から、やがて「この世」に対する執着心が剔抉されてきて、「心」そのものが検証の俎上にのぼらされているのは、本百首を読解するための謂わば鍵になるものではないかと思われる。本百首に仮構された主体は、「この世」に執着し、そこから飽くまで離れずに、「心」そのものを検証しようとする意思を持った人間として造形されている、と基本的には捉えられるように思われる。

「述懐五首」に続いて「雑十五首」が置かれているが、そのはじめの二首、

386 たのむかな春日の山の峯つゞきかげものどけき松のむらだち

387 跡たえてそなたとたのむ道もなし南の岸のしるべならでは  
はそれぞれ、春日明神の加護と南円堂の導きを頼みとすることが詠まれているが、続く

388 しかばかりかたき御法のすゑにあひて哀このよとまづ思ふ哉  
では、「述懐五首」の五首の配列構成と対応するかのようになり、右

のような具体的な問題から展開されて、「この世とまづ思ふ」己れが生を享けた「この世」から目を離さずにいる主体の告白がなされ、続いての歌

389 花の春紅葉の秋とあくがれてこゝろのはてや世にはとまらんでは、そうした「この世」から離れずにあろうとした「こゝろ」が結局は執着のままに「世」に引き留められることになるのではないかと詠まれている。ここでは検証の過程で浮び上がられて来るものは「心」なのであり、こうした「心」の問題を本百首は執拗に問い返しているのである。

ところで、389 番歌の初・二句は定型的な句表現というべき「春の花秋の紅葉」を倒置したものであるが、この歌では「こゝろ」が「世」については留ってしまいかも知れない、その原因を「花の春」・「紅葉の秋」に「あくがる」ることとしている。ここには所謂卑位卑官を嘆く主体の問題はまったく見えない。雑歌は、不遇感を盛るためには最も好都合な器として用意されていたのではないかと予測されるのであるが、本百首の「雑十五首」としてまとめられた歌群は、そうした不遇感の吐露といった性格はむしろ希薄なのではないかと思われる。

当の389 番歌を『注釈』・『訳注』ともに、美に執着する「心」を詠んだものと解釈しているように、その倒置された初・二句の句表現は具体性を持った問題へとは還元できない性格のものであつて、こうした作を定家の不遇意識の反映というような「閑居百首」に対する従来の読解と結び付けようとしても、そこにはどうしても無理が生じてしまう。

ただ、押さえておかななくてはならないのは、この389 番歌も基本

的にはある種の不満足感をそこに聞き取るべきなのだ、ということであろう。この主体は「春」・「秋」を貫く美に「あくがる」るのであるが、その「心」には充足感訪れてはいないのである。それが、いわば不幸なのであり、「世」に執着を残す原因でもあるのだ。そうした不満足感こそ、実は定家の不遇意識の投影なのだと読みを進めることもできそうであるが、それは先見的な穿ちすぎた読み取りであろう。

むしろ、こうした歌を通して本百首が具体的な次元の問題へと還元し得ない極めて抽象的な問題を繰り返して提示しようとする、その姿勢に注目したいのである。まずは本百首中で、389 番歌に見られたような具体的な「花」・「紅葉」ではなくて「春」・「秋」といった抽象性を帯びたままのことばを詠み込んでいる、そのような歌が含み持つ意味を探ってみたい。

こうした抽象性を帯びたままの「春」・「秋」といった語を用いた歌、また飽くまで「この世」に立脚しようとする主体の在り様を示す歌は、「述懐」歌や「雑」歌を離れて春歌や秋歌にも見出せる。春歌の

314 おもしろくさくらさきける此世哉さもこそ月のそらにすむとも

は、赤羽淑が「花や月を憧れ、松風を友とする西行の高雅な精神を羨みつつも、この世的な美や観念の世界にとどまっている自分を省みるのである。」と評するように、この主体は「この世的な美や観念の世界にとどまっている」のであり、それは「述懐」歌や「雑」歌で表明されていた「この世」に執着する「心」の問題と即応している。この主体は「この世」から離れ出ようとは決し

てしていいのである。同じ春歌の、

302 今よりのけしきに春はこめてけり霞もはてぬあけぼののそらは、すっかり霞み切つてはいない時点を捉えて、その時点以後の空の「けしき」に「春」はあるのだらう、と詠んでいる。このような詠み振りは、「春」そのものからは一步退いた主体の、「春」を想い待つ心が浮び上がってくる。こうした読み取りからさらに歩を進めて、そこに昇官の春を心待ちにする主体の思いを捉えることも強ち誤りとは言えないであろう。しかし、この歌の場合も「春」がそのような具体的なものを背景とする寓意として提示されていると読み取るには、少しく抽象度が高いまま「春」なることばが用いられているように思われる。

309 としふれど心の春はよそながらながめなれぬるあけぼののそら

では、「心の春」を『注釈』・『訳注』ともに、春の除目での昇進を果した得意な春を具体的に指すものであると解釈する。

しかし、これまでに引用してきた歌にあった「春」という語の用いられ方を参照してみると、そうした具体性へと「心の春」なる語を還元してしまうと、逆にこの歌に含み持たされている性格が見えにくくなってしまふように思われる。「心の春」に含まれる述懐的（この場合は不遇感の吐露という意）な意味合いを全面的に退けるべきではないが、この歌の場合もそうした述懐的な表現を詠み振りとして装いつつ、一方文字とおりの「心の春」すなわち「心」と「春」の一体感を得ることのない主体の眩きとして受け取ってみる必要もあるのではなからうか。先に398番歌で見たように、この主体は「春」・「秋」そのものに「あくがる」る主体とし

て登場していたのであった。そのような主体の問題として「心の春」なる句表現を読むと、それは「心」そのものが「春」に満たされることのない、一体感の欠如の眩きとして聞き取ることができのではなからうか。

320 のごとにいるはかはらでをしまるゝ春は心のわかれなりけり

この歌の初・二句を『注釈』は「昇進することもなくしてわが位袍の色も変らない、の寓意があるとも考えられる。」と指摘する。寓意の可能性は捨て切れないが、この歌の場合も下句の「春は心の別れなりけり」という、「春」は「心のわかれ」と発見・詠嘆する点に注目しておきたい。ここでも問題は、抽象的な意味合いのまま用いられている「春」ということばと「心」にあるのである。

次に、秋歌の場合を見てみよう。

339 よをかさねにしみさるあらし哉松の梢に秋やすぐらん  
は和泉式部および西行の影響下にある歌であるが、<sup>353</sup> 結句の「秋」の用法は抽象性を帯びたままの提示であつて、先に見たような春歌の場合と同じ性質のものと考へておくべきであらう。

354 あぢきなく心に秋はとまりゐてながむるのべの霜がれぬらん  
の歌もまた観念的な抽象性を帯びたままの「秋」ということばを用いており、その「秋」が「心」に留まっている状態に対して、一方の自然はそうした心的状態とはまったく無関係に秋の終焉へと展開していつてしまふと詠まれている。そこには「自然の秋」と「心の秋」との齟齬が生じている。

ところで、こうした「心」の問題を執拗に提示する「閑居百

首」歌の性格を考えるために、俊成の「述懐百首」中にある次のような作と比較しておこう。

うき身ゆゑ何かは秋もとまるべきことわりなくも惜しみける  
かな  
(長秋詠藻156)

俊成歌の題は「九月尽」である。定家の「閑居百首」の作も秋歌の終わりから二首目であるから、主題もそれほど隔たるものではない。「述懐百首」歌は「うき身」の無力さ故の「秋」のどまりがたさを詠んでいるのであるが、一方の「閑居百首」歌は具體的な「身」の問題を捨象してしまい、「心」の問題さらに「自然の秋」ではなく抽象的な美の本源と関わる「心の秋」の問題へと転換してしまつたがために、「あぢきなく心に秋はとまりぬ」ることになる。これは、「身」の問題だけではなく、そこから離れた「心」の問題をも追究する場へと作品の世界を転換させようとしている「閑居百首」の方法を示すものではなからうか。定家は、父俊成の「述懐百首」を先蹤の作品として視野に入れつつ、俊成の「うき身」といった「身」の問題から脱した「心」の問題を検証しようと目論んでいるのではなからうか。

こうした極めて観念的な抽象性を帯びたままの「春」や「秋」といったことばが「心」ということばとともに詠み込まれていることを踏まえて、その意味するところを和歌の世界の用語に置き換えれば、それは春を「春」ならしめているもの、秋を「秋」ならしめているもの、その「本意」そのものを突き止めようとする、そのような問題を抱えた主体の「心」の問題と整理されてくると思われる。「心の春」・「心の秋」は、参与すべき本意の世界との一体感・合一感をなかなか獲得できないでいる、あるべき世界と

の齟齬に苦しみ、苛立ち、不満に思う、そんな主体の「心」から発せられたことばとして解釈しておきたいと思う。

### 三

それでは、そうした「心の春」・「心の秋」といった、「心」と「春」・「秋」との一体・合一を求める主体の問題が、他の歌ではどのように現出してくるかを見ておきたいのであるが、基本的にはそのような一体感や合一感とは逆の齟齬感として表現されているのが本百首の基本的な詠み振りである。

313春のきて相見んことは命ぞと思し花をしみつるかな  
の場合、本歌である「春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事は命なりけり」(古今集・春歌下97)は花ははかないというが、人こそはかないのだとするものであるが、313番歌では、花と人との関係はちょうどその逆の関係にあって、花をはかないとする一方、人間(主体)のはかなさは消去されて花を惜しむという状況を設定しているのである。「をしみつるかな」は意外な発見であつて、ここでは本歌の世界から否応なくはみ出してしまった主体のとまどう心が示されているのである。つまり、嘗て本歌の世界を信じていたにもかかわらず、その世界とは齟齬する自己の存在を否応なく知らされてしまった主体のとまどいが示されていると解せられる。ただし、この歌で注意すべきなのは、そうした齟齬感といったものが不遇感へと連接されてはいないという点である。齟齬を発見する主体の心因にこそ不遇感があるのだと言えなくもないが、そのような読み取りをすることでこの歌が提起する問題の所在をかえって見えにくくしてしまうように思われる。

こうした齟齬感の表出とは対照的な表現がなされているものを次に見てみよう。

395 菊かれてとびかふ蝶の見えぬ哉さきちる花やいのちなりけん  
先に引用した313番歌と共通する詞は「いのち」であるが、この歌の場合は、「花」と「蝶」との一体的存在が主体によって発見されているのである。いわば、自然の中にいる存在のその一体的な在り様が発見されているのであるが、その発見は同時に、そのような自然の摂理とも言うべきものからはみ出してしまっている人間存在としての主体自身の在り様をも発見していることを意味する。

本首では、こうした自然と主体（人間）との齟齬、逆に自然の中にある物と物との一体といったことを基本にした主題がさまざまに変奏されて詠まれている。すでに引用した399番歌などもそうである。

こうした嘗て信じていた世界との齟齬感、一体感の欠如といったものに苛立ち、悩む主体が抱えた「心」の問題は、同時に己れが信じていた一つの世界といったものに対する根本的な問い返しを促すことになって行く。ために、この主体は和歌の世界では疑うべき対象とはならないことにも疑念を抱く者として登場して来る。

307 ちぎりおけたままく葛に風ふかばうらみもはてじかへる雁が  
ね

は「うらみ」の主語を作中の主体と見るか、雁とすることで解釈が分かれるが、ここでは秋には帰ってくるのが自明のはずの春の帰雁に対して、わざわざ「ちぎりおけ」と呼びかけて約束を求め

ている点に注意しておきたい。そうした約束を雁に対して求めるのは何故かと言えば、つまりはこの主体が持っていた一つの世界観といったものがすでに壊れかけているからであろう。雁が秋に帰ってくることをも疑念の対象にするのは、嘗て己れが信じていた世界に対してこの主体が根本的な問い返しを試みていることを意味しよう。

399 つてにきくちぎりもかなし相思ふこずゑの鴛鴦のよなくの  
こゑ

この歌にも「ちぎり」という詞が用いられているが、ここで表現されているのは「相思ふ」「鴛鴦」の一体的存在と、その「ちぎり」（ここでは、韓憑夫妻の縁を指す。）を「つてにきく」主体の「かなし」という心情にある。そこには、己れにはなかなか訪れない一体的存在への憧憬と同時に根本的な問い返しに苛まれる主体の慨歎を読み取っておきたい。伝え聞いた「ちぎり」であつてもこの主体に切実なものとして訴えてくるのは、そうした主体が担わされている問題が背後に控えているからである。

このような、世界に対して根本的な問い返しをし、その本源を問おうとする主体に共感を持って想い合わされてくるのが、396番歌の天の川の河源に遡って行ったとされる張鸞のような冒険者だったのではなからうか。

396 さかのぼる波のいくへにしをれけむあまのかはらの秋のはつ  
風

ここに現れる張鸞のイメージは雄々しいものではないが、「春」・「秋」を貫く美の本質に迫ろうとし、世界に対してその根本的な問い返しをしようとする志を持ったこの主体には、自己を重ね

合せうる人物として引用されていると解せられるのである。

一方、それでも、この主体にめったには訪れることのない合一感・一体感が表現されているものとしては、次のような場合がある。

305 いろの見えて春にうつるふ心哉やみはあやなき梅の匂ひに  
この歌には本歌を二首指摘することができるが、ここではそうした技法上の特徴に着目するのではなく、「心」が「春」に「うつるふ」という合一感・一体感が本歌を媒介して獲得されているという点に注目しておきたい。この主体の「心」と「春」との和合は、本歌というテキストを媒介にして初めて達成されている。ここに「匂ふ」梅の香は、そうした本歌という古典的世界と直結するテキストを通して、主体の「心」に浸透して来ているのである。こうした歌に不遇意識の反映のかけらもないことは、もはや説明するまでもないであろう。「閑居百首」の重要な主題の一つには、こうした「心」の問題があったことはこれまでも繰り返し述べてきたが、この歌の場合も同様の問題を読み取っておくべきであろう。

またこの主体が、いま見たような古典的世界との合一感・一体感を希求することと対応して、

316 雲のうえのかすみこむるさくら花又たちならぶ色をみぬ哉  
といった歌で表明されるように、「春」・「秋」の美の本質に迫ろうとするその志向に一種の限定が加えられていることにも注意しておきたい。この主体は「この世」に立脚すべき意思を持ちつつ「花の春紅葉の秋」に「あくがる」る主体であったが、そこには右の歌に示されるような王朝的・古典的世界という限定をも自己

に課することを銘記していたのである。

#### 四

「花の春紅葉の秋」歌で表明されていた、この世に執着し「春」・「秋」というものに託された美の本質を追求しようとする主体がどのように一体感を持ち、かつ齟齬感に苛まれているかを見てきたのであるが、そうした主体が立たされている位置は基本的に参与すべき世界の内部に在るわけではなく、その外部にはみ出してしまっているような位置に在るのである。その場合重要なのは、その参与すべき世界と対峙されていたものが、「身」といった具体的な現実を反映する言葉ではなくて、「心」こそが問題なのであると繰り返し表明されていたことである。こうした詠み方から、この主体が具体的な不遇意識といった「述懐」の次元を超えたものをも担おうとする姿勢や態度が、浮び上がってくるのである。

こうした主体設定は、「閑居百首」と定家自身によって命名された作品名と関係してくると思われる。「閑居」なる言葉をどう定義すべきかは様々に考えられるが、ここでは或る与えられた世界から抜け出して（あるいは、はみだしてしまつて）、その結果自己自身の「心」の充足の場をあらたに確保しようとして試みることを説明しておく。そうした定義が本百首において求められるのは、「閑居百首」という作品が、「この世」に留りつつもその与えられた世界を相対化すべく「心」の問題を対峙せしめ、その「心」と与えられた世界との一体・合一はどのように獲得しうるのかといった問題を追求しているからなのである。



「心」を問題とした時、その「心」には何がどのように入り込んでくるのかを検証すべきなのであるが、そうした検証をするには、己れに与えられた世界から一旦その外へ出てみなくてはならない。敢えて世界の外側に立たなければならぬのである。「閑居百首」の「閑居」という言葉はそうした方法の証として意味づけられていたのではなからうか。

本歌の世界とは逆転された発想を持つ歌や、あるべき和歌の世界をも根本的に疑う発想から詠まれた歌は、そうした本来参与すべき世界からは疎外された主体の設定によって、初めて可能なものであろう。言い換えれば、与えられた世界を無垢な子供のよう、にその内部にいと信じることに対する疑問を己れに突きつけ、逆に与えられた世界そのものを問い返すということ、このような疎外された主体を仮構することによってこそ可能となるのである。

人間は彼が生を享ける以前に既に出来上がっている或る世界を受入れる、あるいはそこに参与しなければ、結局己れの生の持続は不可能となるが、歌人も彼が生を享ける以前に出来上がっていた和歌の世界と或る関係を結ばなければ、畢竟歌人として歌を詠む意義を喪失してしまうであろう。定家が「閑居百首」において、このような疎外された主体を仮構したことは、そうした定家以前にすでに出来上がっていた世界が、「心」の問題とどう切り結ぶのかを自己自身に問い返してみる必要があった、ということの意味しよう。古典和歌の蓄積による本意の世界も、歌人に与えられる一つの制度的なものである限り、そこに立ち向かう歌人にとってはなかなかその中に参入できない、硬質な固い・堅い壁

のようなものとして歌人の前に立ちはだかるのではなからうか。とすれば、そうした硬質な世界が「心」（身ではなく）とどのようになりと和むことができるのか、「心」に浸透してゆく世界はどのようなものなのか、そうしてそれはいかなる方法によれば可能なのか、そうした問題を顕在化せしめるために要請されたのが、「閑居」する主体、すなわち世界からはみだしてしまつた「心」を持った主体の設定だつたのではなからうか。「閑居百首」中の齟齬感や、不満げな身振りや慨歎は、そうした堅い・固い世界との和合をなかなか得ることのできない眩きから来ていると解せられる。謂わばこの主体は参与すべき世界となかなかうまく調和できない、そんな「心」を持ってしまつた、あるいは持たされているのである。

その「心」の問題はすなわち、定家の「心」の問題なのだと云えば乱暴ではあるが、しかし右のような本百首の主体に担わされた「心」の問題が、定家自身が抱えていた文学的な問題と無関係であるはずはなからう。

定家にとっては、与えられた世界との調和がどうすれば獲得できるのかが問題であつたのである。その参与すべき世界との和合・和解の方法を探るには、先ず与えられた世界から出ていって見る必要があつた。とすれば、世界から出てゆくという自由を求めするために、本作品において敢えて選び取られたのが「閑居」する主体というものであつたのではなからうか。この文治三年という時点は、彼が侍従職にあつて既に一三年という不遇に悩まされていた時期ではある。確かにそうした不遇感を露骨に表す歌も「閑居百首」には認められるが、それは「この世」から飽くまで離れ

出ようとはしない主体にとつては、目を逸すべき問題ではなかったはずである。しかし、より重要なのは、そうした不遇感の吐露という百首歌の伝統に自己の立場を引き寄せつつも、定家が「閑居百首」という一つの作品で「心」という問題をも追求する場を構築しようとして試みていることなのである。「心」の問題を問いつつ絶好の機会として、定家はこの文治三年二十六歳の時を待ち構えていたような気さえしてくる。寂しく物憂げな歌のその向こう側に、自己の不遇意識を発条に「心」の問題を根本的に問いつつとする定家の強い意志のようなものを見るべきなのではなからうか。「閑居百首」を定家の積極的な内発的動機によって生み出された作品と私が考える所以でもある。

(注) (1) 神谷敏成「藤原定家『閑居百首』注釈(上)(下)」(北海道自動車短期大学研究紀要)第8・10号、昭55・8、昭57・9)では、

「できる限り『閑居』の寓意を探る」方向で解釈がなされている。

なお、以下本稿では当該論稿を『注釈』と略称して引用する。

(2) 赤羽淑「藤原定家の歌風」(桜楓社・昭60)第二章第一節参照。

(3) 以下引用は、閑居百首「は久保田淳」訳注藤原定家全歌集(上)

(下)『(河出書房新社・昭61)、勅撰集・私家集は『新編国歌大観』第一・三巻に拠る。また「閑居百首」のみ歌番号を頭書した。

(4) ここでは仮に「古典歌の再構成」といった説明をしたが、こうした定家の古典歌の自己の表現への引き寄せ方は、いわゆる「本歌取り」の規範には則わないものであり、さらに考えなければならぬ課題である。その点については別途考察したい。

(5) 俊成の「述懐百首」については、松野陽一「藤原俊成の研究」

(笠間書院・昭48)、久保田淳「新古今歌人の研究」(東京大学出版会・昭48)、渡部泰明「藤原俊成『述懐百首』について」(中

世文学」第31号、昭61年5月)などを参照。

(6) 『訳注』と『注釈』では解釈が異なるが、『注釈』の解釈に従う。

(7) 注(2)前掲書一五五頁参照。

(8) 稲田利徳「西行と和泉式部」(中世文学研究)第12号、昭61年8月)参照。

(9) 当該歌に関する『注釈』の「語釈」の項を参照。

(10) 張鷟に関しては、後藤祥子「源氏物語の史的空間」(東京大学出版会・一九八六)第三章2を参照。

(11) 神谷敏成「閑居百首」について」(和歌文学研究)第42号、昭55年4月)参照。

(12) 川平ひとし「本歌取と本説取へもと」の構造」(和歌文学論集8『新古今集とその時代』所収、風間書房・一九九一)中の「テキスト媒介的」という用語に示唆を受けた。

〔付記〕本稿は、平成四年度第42回西日本国語国文学会(九月二七日於佐賀大学)における口頭発表をもとにしたものである。